

## ブギスにおける祭司ビッスの窮状 On a Predicaments of *Bissu* Priests among the Bugis

伊藤 眞 (東京都立大学)

ITO Makoto (Tokyo Metropolitan University)

2022年4月、ボネ県政府は例年開催する建国記念祭行事から伝統宗教の祭司ビッスを排除した。従来、王国の伝統を継承する県政府は、王国由来の神器儀礼におけるビッスの役割を尊重してきたが、今回神器儀礼の執行を認めなかった。行事からビッスが排除されたのは初めてのことであり、マスメディアからも注目された。

ブギス社会におけるビッスの存在は、ジェンダー多様性に関心をもつ多くの研究者によって注目されてきた。王国時代、王権を象徴する神器の管理者であり、儀礼執行者であったビッスは王国の保護下にあった。しかし、王制廃止（1954年）によりスポンサーを失い、相前後して勃発したダルール・イスラーム運動（1950-1965）による弾圧で、ビッスの数は激減した。ビッスが再び息を吹き返すのは、地方分権化に伴う慣習復興の文脈においてである。ビッスは様々な文化行事に招待されるようになり、独特の舞踊を演じることで文化的パフォーマーの役割も果たした。一方、ビッスのもつ宗教的両性具有性を「第5のジェンダー」と再定義する研究が現れると、その特徴的な語法がマスメディアの関心も惹きつけた。

こうしたビッスへの関心の高まりに冷水を浴びせたのが、2022年のボネ県での出来事である。南スラウェシ諸県は建国記念日を制定し、いくつかの県は旧王国との文化的連続性を強調した。王国儀礼の中心にあったビッスの存在は、「文化」の一部として容認されてきた。しかし、今回のボネ県の決定は、建国記念祭が制定される以前からブギス社会が認めてきた伝統的信仰（慣習文化）とイスラームの共存という寛容性を覆すことになった。本報告ではこのボネ県建国記念祭の出来事を起点として、ブギス社会においてビッスがもつ社会的位置づけを、最近の反LGBTQの動向にも注目しつつ、考えてみたい。

### 参考文献

伊藤眞 2019 「LGBT とワリアのはざま」、社会人類学年報第 45 巻 157-173 頁。

パネル発表用趣旨説明

パネルタイトル  
ーサブタイトルー(あれば)  
Panel title (英語) : Subtitle (英語)

趣旨説明  
About the Panel

パネル責任者名→ 山田 花子 (所属)  
YAMADA Hanako (所属英語名)

趣旨説明を MS 明朝、11 ポイントで入力してください。  
800 字程度でお願いします。文献等を引用する場合は、文献リストを含みます。

発表者

- (1)氏名 (所属) : 発表タイトル
- (2)氏名 (所属) : 発表タイトル
- (3)氏名 (所属) : 発表タイトル

- ※パネル責任者は必ずしもパネル内で発表をしなくてもかまいません。
- ※発表者は 2 人または 3 人とします。人数に応じて、80 分または 120 分が配分されます。
- ※このページに続けて、各発表者の発表要旨を 2 頁目のフォーマットを用いて作成してください。